

平成 17 年度都市再生プロジェクト推進調査費

木屋町・都心繁華街の安心・安全コミュニティ及び
地域景観の形成プロセス検討調査

報告書

<要約編>

平成 18 年 3 月

国土交通省都市・地域整備局

木屋町・都心繁華街の安心・安全コミュニティ及び

地域景観の形成プロセス検討調査（要約編）

（国土交通省都市・地域整備局）

【調査目的】

本モデル調査では、京都一の繁華街であり、治安の悪化、放置自転車、風俗産業の増加、看板の氾濫、ゴミの散乱など、以下に示すような様々な課題を抱える木屋町界隈を対象に、住民ネットワークの強化、事業者間のネットワーク構築、及び両者の有機的なネットワーク形成が、良好な地域環境の創造・継承と、さまざまな課題の解決につながるという仮説のもと、まず、住民・事業者ネットワーク形成のプロセスを明らかにすることを目的としている。また、課題解決の具体的な実践を通じて住民・事業者のネットワークを少しずつ形成することにより、今後のまちづくりの展開の体制基盤づくりを行いながら、関係者による望ましい地域将来像の構築や景観協定の締結を目指したい。

【地区の概要】

木屋町界隈を含む立誠学区は、第二次町組改正で編成された 66 の番組のひとつ下大組 6 番組であり、中京区で最も東南部に位置する。北は三条通、南は四条通、東は鴨川、西は寺町通に囲まれた京都を代表する繁華街としての賑わいと、高瀬川や桜・柳の並木、花街・先斗界隈に見られる風情ある景観が相まった、京都・都心部の個性豊かな多面性を持つ地域である（図 1）。

歴史的には豊臣秀吉が行った都市改造の中で誓願寺をはじめとする大刹が集められ寺の町が作られ、角倉了以の高瀬川開削による水運の発達と共に、材木、木屋、米屋などの商家が発展し、また 1674 年には花町、先斗町が出現した。また幕末維新の舞台となり、池田屋跡、海援隊屯所跡、土佐藩屋敷跡、坂本龍馬の暗殺された近江屋跡など数多くの史跡が残され、歴史的に価値の高い場所である。

1995 年の国勢調査によると人口 850 人、戸数 356 戸であり、人口・戸数ともに中京区の 23 学区の中で最も少ない。古くから繁華街であった当学区の人口は、1975 年の調査時から同じ区である中京区や京都市の平均人口には全く及ばず、特に 2004 年度調査では、中京区の平均人口の約 4 分の 1 と大きく引き離され、その差は顕著に現れた。また、中京区が 1995 年を底に、2000 年、そして昨年 2005 年と人口数を回復しているのに対し、当学区は依然として減少傾向が続いており、主要産業は卸売・小売業、飲食業でその事業所数は約 85% を占めている。

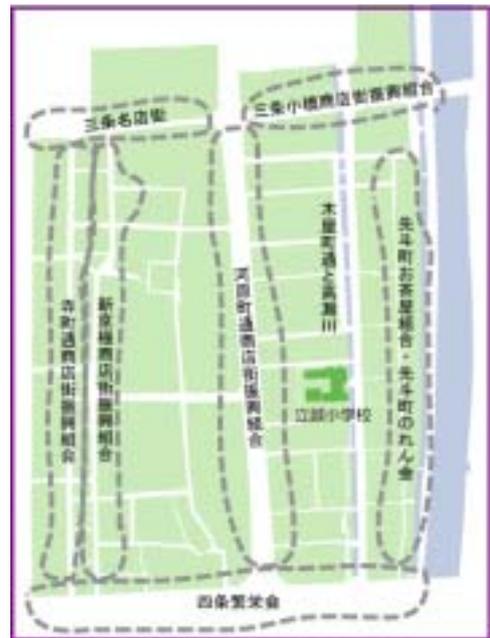


図 1 立誠学区内の事業者団体

【地域の活動】

「立誠まちづくり委員会」は、立誠学区における安全で安心、地域の繁栄、すみよい環境など、理想的なまちづくりを目指して多面的に取り組むため、2004 年に前身である「木屋町地域安全対策委員会」から発展して結成された。地区内を貫く高瀬川や木屋町沿いの桜並木等の魅力資源を核にした地域イメージの向上、繁華街の用途多様性を前提とした安全・安心まちづくりと商業の活性化、地域景観の創造を目指している。

結成した 2004 年度にはまず防犯カメラ、景観、駐輪、ごみについて重点的に話し合い、2005 年度には本調査に選定されたことにより、様々な幅広い地域活動を通じて、さらに木屋町の魅力づくりと各種課題解決に積極的に取り組んでいる。

【顕在化している課題】

治安

木屋町界限では、大学生やサラリーマン等が気安に楽しめる街であったが、2000年頃までは治安が悪化している状況であった。

行政、警察、地域事業者・住民という三者が協働し、パトロールの強化、木屋町における防犯カメラの設置等その管理・運営が重要である。

路上駐輪

木屋町界限にはピーク時に約1,500台の路上駐輪がある(2005年河原町商店街振興組合調査)に対し、先斗町駐輪場は自転車約300台、バイク約300台の収容能力しかない。

京都市では、自転車駐輪場付置義務を強化し、2000年に小売店舗、遊技場、銀行・信用金庫をその対象に追加しており、長期的には問題解決に向かうと予想されるが、当面の対処方法に課題が残る。

風俗と性風俗

立誠小学校の廃校に伴い、木屋町通に風俗の出店が可能となったが、京都市が元立誠小学校を高倉小学校の第2教育施設として位置づけ、今後の出店を当面抑えた。

性風俗を追い出す方向で取組みを進めるのか、あるいは風俗店も一業種として認め、店舗の多様性に対して寛容な繁華街としていくのか、地域住民・事業者がその方針を共有することが重要である。

看板

店舗からせり出した置き看板は、歩行者にとって危険なものもあり、突き出し看板は災害時に脅威となりうる。これらの多くは道路上を不法に占用している。

看板は商売に直結することから、具体的なイメージが共有されにくい。2004年の景観法施行に伴い、屋外広告物法についても一部改正が加えられるなど、今後は景観協定などの制度の利用が考えられる。

ゴミ

ゴミのポイ捨ては、どこの繁華街でも問題となっている。また、看板の問題と関連して、街の電柱等に貼られたはり紙や立て看板などの違反広告物が散見される。

2004～2005年度は京都市の京(みやこ)・華やぎ隊が清掃活動や啓発活動を通して対処した。これは永続的なものではなく、時限的な措置であるため、2006年度以降の対応策を検討する必要がある。

【目標イメージ】

「顕在化している課題」は、それぞれ独立した課題ではない。それぞれがまちの魅力を奪うことにより、さらに悪化するという悪循環をなしてきた。例えば、性風俗が増えることにより、派手な看板が増え、悪質な客引きが増える。現在では、街のイメージから出店を控える状況も見受けられる。京・華やぎ隊や共同パトロールなどの京都市、警察および地域の取組みは、この悪循環の流れを変えるという点で効果的であった。

しかし、行政のこのような特別措置は永続的に続くものではない。この流れを継続するために、地域が行動できるような態勢を整える必要がある。中京区では、基本計画で「繁華街振興ビジョン(仮称)」の策定を検討しているが、立誠学区あるいは木屋町界限としても、地域事業者、住民、行政が協働して地域の安全・安心、街並み景観の向上を目的とするまちのビジョンを策定し、それを実行に移す団体として、木屋町界限における事業者ネットワークをつくるのが重要といえる。

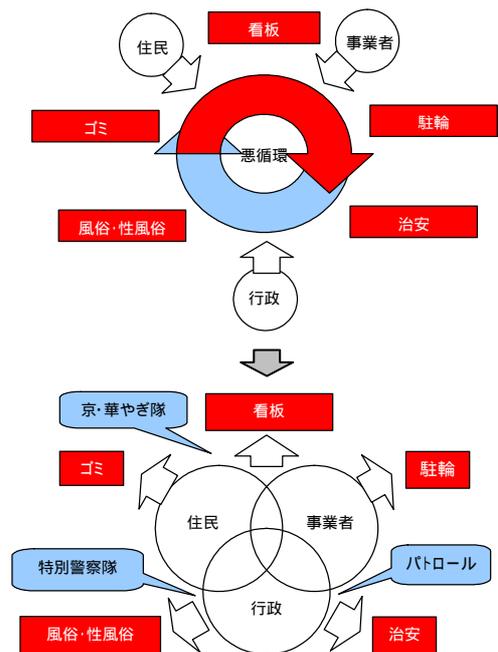


図2 諸問題の悪循環から住民、事業者、行政の協働による良い循環へ

【調査概要】

法制度や先進事例、地域の基礎情報を収集する「一般基礎調査」と、地域のネットワーク強化とビジョンづくりにつながる実験などの取組みを行った。調査に際しては、「安心・安全コミュニティ」を実現すること、住民にとっての居住環境と事業者にとっての活性化を同時に満たすこと、まちの魅力を引き出し地域景観の創出につながることの3点に十分注意を払い、調査や実験などを設計し、その結果に対して分析を行った。

表1 調査の種類とその概要

<一般基礎調査>

A. 「風俗」「性風俗」の法制度	問題点の整理と風営法との関連
B. 繁華街再生の事例(ニューヨーク)調査	成功の要因は官民の協力とまちのビジョン
C. 駐輪調査	自転車適正利用のための基礎調査
D. 登記簿調査	木屋町通沿道の土地・建物所有者の特定

<ネットワーク強化と地域ビジョン作成に向けた調査>

E. まなびや2005シンポジウム	小学校跡地の重要性、魅力の創出の必要性
F. 高瀬川・元立誠小学校プライトアップ 実験調査	明るい繁華街におけるライトアップの手法について
G. 木屋町(照る、てる)ランプの旅 実験調査	明るい繁華街におけるライトアップの手法について、高瀬川・小学校の魅力
H. お店・お客様アンケート	地域の結束力の強化、まちづくり活動の確信
I. ニュースレターの発行	活動の周知
J. 公開討論会	小学校跡地の重要性、地域ビジョンの作成

【調査結果】

E. まなびや2005シンポジウム(写真1)

立誠小学校の卒業生である俳優、近藤正臣氏をはじめ多彩な方々を迎え、木屋町の事業者や京都出身の芸術家など様々な立場から、木屋町境界の問題と将来像についてパネルディスカッション方式で主に「昔は良かったか？昔とはいつのことか?」、「元立誠小学校跡地利用について」の2点について討論された。特別な歓楽街である木屋町が、昔の風情を失うことではなく、他の歓楽街と変わらなくなりつつあるのが問題であり、単に「昔に戻せ」ということではなく、今後を考えようという提案がなされた。



写真1 まなびや2005シンポジウム

F. 高瀬川・元立誠小学校ライトアップ 実験調査(写真2)

明るい繁華街における木屋町の風情を活かした効果的なライトアップ手法として、繁華街の明るさの中にある「暗い部分」にほのかに光を当てることで、地域全体の印象が大きく変わることがわかった。木屋町に「悪い」イメージをもっている人も多い中、ライトアップを魅力発信の手段として「良い」と大半の来訪者が感じていることもわかった。



写真2 元立誠小学校のライトアップ

G. 木屋町(照る、てる)ランプの旅 実験調査(写真3)

繁華街の明るさとは異なる種類の明るさを演出することで、地域の魅力を引き立たせる効果が出ることがわかった。住民にとっては、夜中に明るすぎるとの意見も聞かれ、今後に向けては、継続的に実行する場合の実施体制および近隣住民への配慮や広報体制といった課題が浮かび上がった。また、三条通や四条通から客を誘導するような仕掛けも必要である。



写真3 高瀬川のライトアップ

H. お店・お客様アンケート

「お店」調査(配布:500店、回収:307店)と「お客様」調査(配布:2500人、回収1054人)の二種類のアンケート調査を同時に実施し、その配布回収ルートには、五条料理飲食業組合、中京料理飲食業組合、三条小橋商店街振興組合、先斗町のれん会、先斗町お茶屋営業組合、京都レジャービル産業、まなびや協賛店などの各種事業者団体および事業者の協力を得た。以下は、「お店」調査の結果の抜粋である。

安全面について

「木屋町を怖いと思う」(45.9%)の方が「そう思わない」(36.5%)よりも多く(図3)、「木屋町界隈の現状」について「不満である」は68.1%と高かった(図4)。木屋町特別警察隊については78.8%が歓迎しており(図5)、地域と警察の連携が求められているといえる。

自治連合会とまちづくり委員会の認知度について

これまでの立誠自治連合会として活動の認知度は79.2%と高く、立誠まちづくり委員会の活動も、「良いことだ」が94.1%であり、高い支持を得ているといえる(図6)。

今後の取り組みにむけたアイデアについて

高瀬川清掃は、「なるべく支援」(74.6%)、「参画したい」(8.8%)となっており、高瀬舟の運行についても、「なるべく支援」(53.1%)と「参画したい」(9.1%)が多く、明確に「反対である」(6.8%)は少ない(図7)。

防犯カメラの設置は、67.8%が賛成しており、明確に「反対である」(9.1%)としているものは比較的少ない(図8)。

深夜にミニバスを走らせるアイデアには、「賛成」(31.9%)も相当数あるが、「分からない」(49.2%)が多い(図9)。

立誠小学校跡地の今後の利用については、修復保存(58.6%)が多く、解体新築(18.9%)は比較的少ない(図10)。跡地の活用については、「演劇・アートの教育拠点」の案に対して、賛成が60.6%であった(図11)。

木屋町・先斗町界隈の魅力アップに関する自由意見

<まちのビジョンに関して>
 ・京都観光都市として、どうあるべき姿かを考え、それに沿ったまち全体の協体制が必要。
 <立誠小に関して>
 ・演劇、図書館、イベント会場など大人の魅力ある場所に。
 ・立誠校に交番の設置。
 <並木、高瀬川に関して>
 ・もみじ、さくら、のライトアップを強化して欲しい。
 ・観光の街として、この先やって行かなければならないと思うので、お金をつぎ込んで高瀬川側を情緒ある街へ。
 ・高瀬川沿いが、散策するのに綺麗であって欲しい。
 <景観に関して>
 ・看板等の色を落ち着いたものにしたら良いと思う。
 <「木屋町」のピーアールに関して>
 ・安心・安全の活気ある町としてのピーアールの継続。
 ・木屋町の会報誌(いるんな店を紹介、木屋町についてのコラム)を河原町や各駅に配置。

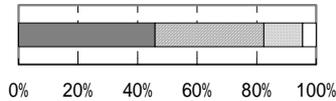


図3 木屋町界隈はこわい場所か

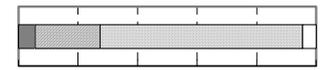


図4 木屋町の現状について

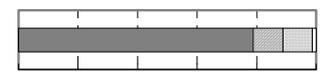


図5 木屋町特別警察隊について

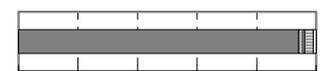


図6 まちづくり委員会について

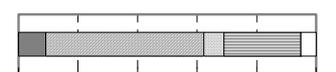


図7 高瀬舟の運行について

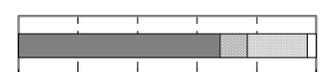


図8 防犯カメラの設置について

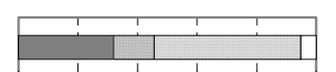


図9 深夜のミニバスを走らせる

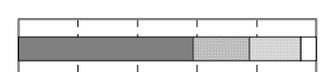


図10 立誠小の今後の利用



図11 立誠小をアートの教育拠点に

J. 公開討論会

立誠小学校跡地の活用方法の具体的な提案を題材に、木屋町界隈のビジョン作成に向けた意見交換の場として計2回の公開討論会を行った。その結果、「安心・安全環境の充実」「にぎわいのある木屋町にするためのネットワークの充実」「高瀬川を軸とした環境整備」などの視点は、参加者間で共通であることが確認された。また、立誠小学校跡地を話題の切り口にすることにより、ともすれば抽象的になりがちな「まちの将来像」に関して、具体的な議論の出発点を設定して進めることができたといえる。

【本調査と並行する動き】

高瀬川会議

木屋町界隈の商店主や住民により平成17年9月に結成され、将来的には高瀬川に舟を運航することを目標と掲げ、月1回定例会議を開催している。平成18年4月には「高瀬川音楽祭」を企画し、高瀬川により多くの市民の目を向けるべく取組を進めている。

木屋町共栄会

三条・四条間の木屋町通及びその界隈の居住者、営業者により平成18年3月に正式に発足し、木屋町地域に人々の流れを呼び込み活気をもたらすだけでなく、グレード高いまちづくり、木屋町地域の公的な会を目指している。平成18年3月現在で55名の参加を得ている。

京都市による「歩いて楽しいまちなか戦略」の推進

細街路の通過交通、自転車のマナーや放置が問題となっている中、京都市では平成18年度から、御池通、河原町通、四条通、烏丸通に囲まれた地区において、交通社会実験をする予定である。木屋町界隈はこのエリアに隣接しており、京都市による本施策と十分に連携する必要となる。

立誠小学校の実験的利用の活発化

- ・第19回高瀬川桜まつり
- ・ART BEAT KYOTO 2005
- ・第31回高瀬川灯ろう流し
- ・第3回中高生ミュージカルスクール
- ・スポーツフェスティバル
- ・まなびや2005
- ・演劇公演「天守物語」小川眞由美＋劇団とっても便利
- ・チャップリンの日本 3/25～4/2

【まとめ】

安心・安全環境のための基盤づくり

最低限の安心・安全環境としては警察による治安対策が基本であるが、人々の目がまちに向くことでまちの死角が少なくなるように、地域の努力が加わることで安心・安全環境のための基盤ができる。木屋町パトロール実施の積み重ねや、アンケート調査、ニュースの発行等により、木屋町界隈に人々の目が向けられるように取り組んできた。

京都らしい資源を活かしたまちの魅力増進

上記の悪循環を断ち切るためには、それぞれの課題により奪われているまちの魅力以上の魅力を作り出すことが、本質的な解決につながる。歴史・情緒・景観といった「京都・木屋町界隈」のまちの資源を活かして魅力増進を図ることが特徴である。

住民・事業者ネットワークの構築

今まで活動してきた個人および自治組織・商店街・事業者組合等の組織をていねいにひろいあげ、それをコーディネートすることでネットワークを豊かにしてきた。毎回開催するまちづくり委員会では共通意識を醸成し、シンポジウムでは広く世間に木屋町界隈の問題を投げかけた。ライトアップによる社会実験で、繁華街の照明のあり方を検討し、まちの魅力と安心の可能性を形として実感した。お店・お客様アンケートではまちづくり活動に対する支持の確認と参加の促進を行った。これらは関係者を増やす効果を持ち、ネットワークの核の形成に役立った。

地域主導の進め方

まちの課題に全体的に対応するために、今回の調査では地域の熱意を尊重し、地域主体の活動に行政の関連部署が必要に応じて協力する体制をとった。特に本調査では「まちの魅力増進」を対策の柱に据えており、そのためには地域主体の活動によりまち自身が変わることが必要である。

警察との連携

本調査では、都市再生モデル調査事務局会議、及び立誠まちづくり委員会に京都府警及び管轄の警察署が出席するという連携体制をとることができた。これにより京都府警による祇園・木屋町特別警察隊の活動状況を地域が把握しやすくなり、また照明実験時に警察車両の赤色灯の点灯を控えてもらうなど、実質的な連携が行われた。まちづくり活動を進める上で市や区単位の行政と協働することは多いと思われるが、繁華街の課題においては警察との連携が非常に有効である。